

春夏秋冬

台湾徒然



第48回

公教育百十五年

柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ
京都市生まれ。99年度「潮質」ノンフィクション
部門優秀受賞。著書に「台湾先住民・山の女た
ちの聖戦（現代書館）」「台湾革命」（集英社新書）
「明治の冒険科学者たち」（新潮新書）など。最新
刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住
民族と日本」（かわさき市民アカデミー出版部）

漢民族を主体する台湾は、教育熱心で知られる。7月初旬に行なわれる大学や高校入学統一試験には、かつて祖父母も含め一家そろって出勤し、運動場から子女を応援する風景が見られた。

誘拐事件を題材にした『熱帯魚』という名画もあった。入試を控えた受験生が誘拐されるのだが、親たちはテレビで入試の日だけは子供を返してくれと訴える。誘拐犯もこれには共感し、監禁している子供に参考書などを与えて叱咤激励するという物語だった。

そうした時代ともいまや隔世の感がある。日本と同様に少子化が進み、一時専門学校を続々大学に昇格させたつげがまわり、定員割れをおこすほど大学が余ってきたのである。そこで教育部は、「低級」大学・学部の一斉淘汰に乗り出すこととなった。

悲鳴をあげているのが先生たち。学生の授業や行事への参加率、授業の評判（定期アンケート実施）のほか、先

生の論文執筆数、学会へ参加回数、博士の割合から構内の美化に至るまで、無数の項目が点数化されることになった。当落線にある学校では、教授陣への点検が強化され、先生はそのために授業どころではないほど辻褄あわせに追い回されているというのである。

また、台湾では、義務教育12年を目標にした一大プロジェクトも進行中。これら諸々の改革は、基本的に受験地獄からの解放を旗印におこなわれてきた。最近、我が家のそばにある英語幼稚園がとつじよ閉鎖されたりしたが、

バイリンガルの幼児教育が禁止されたせいだという。矢継ぎ早の変化に親も教師も振り回されるばかりである。

さらに教育界全体を揺るがしている問題が、大陸からの教師と学生の受け入れ。これは、大陸での学歴を認めるという重大な政策変更にあたり、反対に台湾から大陸に「留学」する人たちの学歴承認にもつながる。教育の面

も、海峡に立ちふさがっていた障壁がなくなり、それはまた高等教育が大陸中国との境界のない競争社会に飲み込まれていくことを意味する。

こうしたさまざまな問題をはらんで躍動する台湾の公教育だが、その発祥は明治28年（1895）の日本語教育施設の創設にさかのぼる。下関条約で台湾を領有した日本は、台北の士林という郊外に公立の学校（のち芝山巖国語伝習所を経て士林公学校）を設置して、台湾人に日本語を教え始めたので

ある。初代校長は、総督府学務部長の伊沢修二。東京高等師範や東京音楽学校（現東京芸術大学）の校長を歴任した明治を代表する教育者である。

この学校に最初に赴任した先生6人は、明治29年元旦未明にゲリラ（台湾側からは抗日英雄ともいう）によって虐殺されるという悲劇に遭遇するのだが、そうした劇的な幕開けをした台湾の公教育は、日本統治時代、国府時代と波乱万丈の転変を経て、いまた大きな曲がり角を迎えようとしているのかも知れない。



芝山巖に残る記念碑を訪れた日本の学生たち

悲劇の舞台となった国語伝習所の後身が現在の台北市立士林小学校で、その歴史百十五年を誇る。そして最初に学校が設置された芝山巖の丘の上には、伊藤博文が揮毫した6人の先生の遭難を記念する石碑（写真）が残されている。